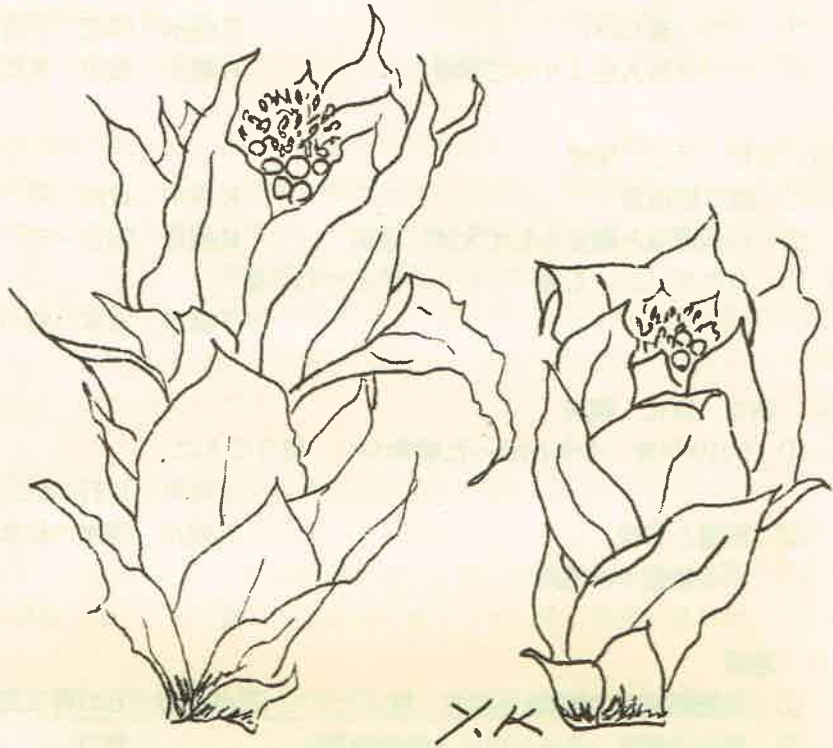


エゾアツ



2011 春季号 96

北海道ボランティア・レンジャー協議会

目 次

96号

- 1 「持続可能な——」会長 春日 順雄

- 2 観察会などから
 - ① 冬の森の観察会（下見）に参加して 札幌市 伊藤 清治
 - ② 冬の森の観察会に参加して 札幌市 吉嶋 絵美
 - ③ 「冬の楽しみ」 札幌市 渡辺 早苗
 - ④ ヨレタ新入生よりのご挨拶 札幌市 渡辺 文高

- 3 自然 共生 環境
 - ① 眠り姫仮設 札幌市 成田 伸一
 - ② 自然環境と観光そして大地に感謝 札幌市 国吉 守
 - ③ 自然界における糞「うんち」にまつわる話 千歳市 宮本 健市

- 4 調査 研究 翻訳
 - ① 2010年度 今年出合った植物から 思うままに 平取町 川村 桂介
 - ② 記憶と省察 札幌市 清水 利章
 <総会>の案内

- 5 連載
 - ① 支笏湖河畔の観察 苫小牧市 谷口勇五郎
 - ② 北の芸術家シリーズ③ 木田金次郎 広報部

- 6 会員の独自活動の紹介 広報部 事務局

- 7 事務局便り 事務局

- 8 小樽支部 活動計画 小樽支部

- 9 NOW 9号 10号

編集後記

「持続可能な……」

春日順雄

持続可能な社会、持続可能な低炭素社会、持続可能な都市、持続可能な農業、持続可能な水産業、持続可能な林業、持続可能な開発など、「持続可能な……」という言葉遣いを目にする事が多くなりました。

「持続可能性」という概念は、1987年に発表された国連の『ブルントラント委員会報告書』（“Our Common Future” 邦訳『地球の未来を守るために』）によって確立されたということになっています。ブルントラントさんは、当時ノルウェーの総理大臣をしていた女性で、もともとの職業は医師だそうです。持続可能性の定義は下記の通りです。

持続可能性の定義（ブルントラント報告書から）

『新・環境倫理学のすすめ』加藤尚武著・丸善ライブラリーより引用

- 1, 持続可能な開発とは、未来の世代が自分たち自身の欲求を満たすための能力を減少させないように現在の世代の欲求をみたくような開発である。
- 2, 持続的な開発は、地球上の生命を支えている自然のシステム—大気、水、土、生物—を危険にさらすものであってはならない。
- 3, 持続的開発のためには、大気、水、その他自然への好ましくない影響を最小限に抑制し、生態系の全体的な保全を図ることが必要である。
- 4, 持続的開発とは、天然資源の開発、投資の方向、技術開発の方向付け、制度の改革がすべて一つにまとまり、現在及び将来の人間の欲求と願望を満たす能力を高めるように変化していく過程をいう。

持続可能性の定義の理解のために、ハーマン・ディリーの考えを併記します。

ハーマン・ディリーの持続可能な発展のための三つの条件

『新・環境倫理学のすすめ』加藤尚武著・丸善ライブラリーより引用

- 1, 土壌、水、森林、魚など再生可能な資源の持続可能な利用速度は、再生速度を超えるものであってはならない。（たとえば魚の場合、残りの魚が繁殖することで補充できる程度の速度で捕獲すれば持続可能である）
- 2, 化石燃料、良質鉱石、[地質に閉じ込められていて循環しない] 化石水など、再生不可能な資源の持続可能な利用速度は、再生可能な資源を持続可能なペースで利用することで代用できる限度を超えてはならない。（石油を例にとると、埋蔵量を使い果たした後も同等量の再生可能エネルギーが入手出来るよう、石油使用による利益の一部を自動的に太陽熱収集器や植林に投資するのが、持続可能な利用の仕方ということになる）
- 3, 汚染物質の持続可能な排出速度は、環境がそうした物質を循環し吸収し無害化できる速度を超えるものであってはならない。（たとえば、下水を川や湖に流す場合には、水生生態系が栄養分を吸収できるペースでなければ持続可能とはいえない）

「持続可能性の定義（ブルントラント報告書から）」と「ハーマン・ディリーの持続可能な発展のための三つの条件」をもとに「持続可能な…」について考察してみます。

現在の世代の欲求をみたくつつ「次代に引き継ぐ」が要諦であります。

人類は地球上で誕生して以来、地球上のあらゆるものの利用と恩恵のもとに今日に至っ

ています。人類の生活を支える、土、岩、金属、水、空気（酸素、二酸化炭素など）、石油、石炭などのあらゆる鉱石と鉱物。人類の命を支える動植物。人類の心を癒す動植物。人類にとって美しさや尊厳の対象となる景観。地球丸ごとが私たち人類を支えているのです。

ところが、人類の過度の開発行為や消費活動によって、それらの枯渇や環境破壊が心配される今日であります。人は生きている限り地球丸ごとにお世話になります。あらゆるものの利用を抑制の効いた活用、工夫によって、未来永劫にわたって人類と人類を支えてきた丸ごとの地球の存在を願うのが、「持続可能な…」に込められた願いと考えます。

引き継ぐものはなにか

① 枯渇型の資源

石油、石炭、レアメタルなどは、枯渇型の資源です。使い切ると枯渇します。抑制した使用と再生可能な資源を利用するなどにより枯渇型の資源を次世代に残すということが必要であります。ただし、再生可能な資源については、再生ペース以上の消費はいけません。再生可能な資源に頼らない技術の開発も必要でありましょう。

熱帯雨林を伐採しパーム油の収穫をめざす開発のニュースを見たりしますが、環境破壊であります。愚かなことでもあります。

② 再生可能な資源

農業、林業、水産業などは、再生可能な資源であります。春、作物の種子をまく。秋には収穫。一年に一度の再生であります。トウモロコシ、米などは、アルコール変換ができます。石油などの代替エネルギーとして活用できるものです。林業の木材は、年を経ると大きな木に育ちます。長いスパンの再生であります。これらは再生される量以上のスピードで消費してはならないものであります。水産資源、これも、再生期間に配慮すると、永劫にわたって利用できる資源であります。

③ 地球上の生命を支えている自然のシステム

ブルントラント報告書の「持続可能性の定義」には、

- ・持続的な開発は、地球上の生命を支えている自然のシステム—大気、水、土、生物—を危険にさらすものであってはならない。
- ・持続的な開発のためには、大気、水、その他自然への好ましくない影響を最小限に抑制し、生態系の全体的な保全を図ることが必要である。と、述べています。

「地球上の生命を支えている自然のシステム」と「生態系の全体」は、次の世代に引き継いでいくものであります。いずれも大きな概念です。大きな視野からの保全と次の世代への引き継ぎが必要であります。

④ 尊厳ある自然

この項目は、前述の③と重なるとも考えられますが、あえて、項目を起こしてみました。

秋の美しい紅葉の森を歩いたとき、小道をたどり突然眼前に開けた水音高く砕け散る滝に遭遇したとき、息をのみ、ただ自然の大きさに圧倒されるという体験をしたことがありました。これはまさに尊厳ある自然との遭遇であります。宗教心の発端もこのようなところにあるのでしょうか。尊厳ある自然も次の世代に引き継がれるものでありましょう。

ブルントラント委員会報告書の後、1992年リオデジャネイロで地球サミット「持続可能な開発に関する国連会議・リオ宣言・アジェンダ 21「持続可能な開発のための人類の行動計画」、1997年テサロニ会議「環境と持続可能性のための会議」、1997年京都議定書、2002年ヨハネスバーグ会議・持続可能な開発に関する世界サミット・「持続可能な開発に関するヨハネスブルグ宣言」と、続いています。「持続可能な…」は国家間の思いの違いをはじめとして様々なことが関わり合い、その実現は、むずかしい要素を含んでいます。

冬の森の観察会(下見)に参加して

2011年2月12日

札幌市 伊藤清治

数日前までの天気予報は雪でしたが、当日の野幌森林公園は朝から晴天にめぐまれました。今回は雪が積もったなかの観察会でしたので見るものが少なく退屈するのではと思っていました。それは、いらぬ心配でした。春日会長をはじめ先輩ボラレンのみなさんの説明は興味深いものばかりでしたので少し紹介します。

刃物で切ったような小枝が落ちているのをみかけました。こんな場所でどうして枝を切り払う人がいるのか不思議でした。ウサギが噛み切ったものと教えていただき、ナルホドと納得。

「ヤチダモは雄の木と雌の木がある(雌雄異株という)が、この木はどちらでしょう」とクイズが出題されます。答えはヒゲのようなモヤモヤしたように見えるものが雌。種子を付けていた名残が遠目にはヒゲのように見えるようです。

木の低い位置にクマゲラがつついた穴がありました。クマゲラの主食はアリで、餌採りに夢中になると人が近づいても逃げないそうだ。今冬、ク

マゲラを見つけたくて上のほうばかり気にしていましたが、これからは見るべきポイントも変える必要がありそうです。

このように、いくつもの観察のポイントや同定の方法を聞きながらの2時間でした。冬でも興味深い自然がたくさんあることがわかり楽しい時間を過ごすことができました。

下見終了後、友人と森林公園温泉に寄り入浴後にビールをあげ、さらに楽しんだ良い一日となりました。



冬の森の観察会に参加して

吉嶋 絵美

雪の残っている動物の足跡を見ても、何の動物なのか知らずに30年以上生きてきましたが、自然が大好きな息子の知りたいという気持ちは大事にして答えたい、と思っていました。そんな時、新聞で今回の企画を知り、主人と息子、娘の家族4人で参加させていただくことにしました。

野幌森林公園の中に、冬でも散策できるコースがあることも今回初めて知ったのですが、冬の森の中には夏には見えない動物達の様子が見えて、こんなに沢山の動物がここで生活しているんだと知り驚きました。

ガイドくださったボランティア・レンジャーの方が子ども達に親切に解説してくれ、動物の足跡についてや、木の芽の仕組みやエゾマツとトドマツの違いについてなど今まで知らなかった事を教えてもらえて子ども達の目がキラキラ光って生き生きとした表情を浮かべていました。

息子だけでなく、主人と私も初めてウサギの足跡とキツネの足跡の違いや、進んでいる方向についてや、ネズミの足跡の事、又、無駄のない自然の循環サイクルについて知り、感動しました。そして、私達人間はこの自然のサイクルから逸脱した存在なのだと改めて感じ、今一度自分の生活を見直さなければと思いました。

自然の中は、発見の連続で、飽きることなく約2時間の観察会を楽しみ、息子も大満足、私達大人もリフレッシュできました。

最後まで、親切に解説してくださり、息子の質問にも一つ一つ丁寧に答えてくださったボランティア・レンジャーの皆さん本当にありがとうございました。今回の学びはきっと子ども達の財産になるだろうと思います。

(平成23年2月13日)



北海道林業試験場発行の「フォレストガイド秋季講座」から

「来月は藻岩山よ」・・・熊野さんから声をかけていただいたのは、円山 八十八ヶ所観察会のあとのことでした。

冬山を登ったのは、ほぼ初めてだったので「藻岩はハードルが高そうで私には無理」と思っていたのですが「藻岩でクマゲラを見た」「ウサギの足跡が見られる」との誘惑に参加を目標にして、数回、円山でトレーニング。そそっかしい私はいつも時計を忘れ、時間を計るのを忘れてしまうのでした。

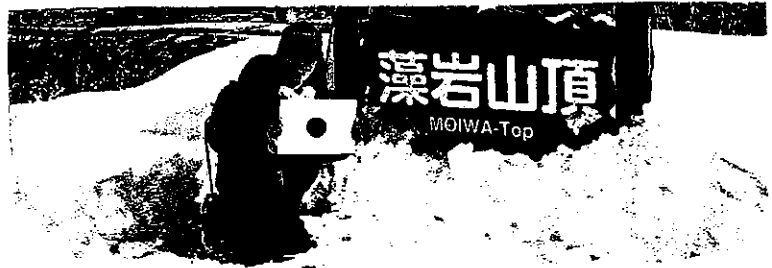
2月20日。前日集合時刻を調べ、バスで向かいましたが、なんと1時間前には着いてしまい、心細く不安と緊張の時間が少々経過・・・青空と野鳥を眺めて皆さんを待ち、いよいよ出発。

登山口を数歩進むと、すぐに不安や緊張は吹き飛び、景色や樹木、多くの方とのすれ違い時の挨拶など、それぞれ“山盛り”の楽しい時間に何度「たのしい！たのしい！」と心の中で叫んだことでしょう。

時々立ち止まり、かわいい冬芽の観察や樹木の特長、名前の由来など勉強になることが多く、レンジャーさんの知識の豊富さや体力に驚くばかりでした。

今回クマゲラを直接見ることは出来ませんでしたが、「ウサギの足跡」を発見、そして密かに企んでいた『頂上で日の丸！』・・・私のイタズラ心を笑いながら、快く撮影にご協力いただいた山川さん。ありがとうございました！

下山の最中も樹皮について、違う楽しみ方を教えていただいたり、レンジャーさんのいる安心感から不安なく、解散まで充実した時間を過ごすことができ、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。



解散後の私は帰りのバス時刻を調べるのを忘れて、おそらく最年少の参加者だったにもかかわらず、すでに筋肉痛となっていた重たい足と共にさらに歩いて自宅まで帰るといっておっちょこちょいぶりを発揮していたのでした・・・(苦笑)

昨年10月3日に「H22年度 北海道ボランティアレンジャー育成研修会」の三日間に亘る研修を無事終え、知事名の修了証書をいただき同時に北海道ボランティア・レンジャー協議会に入会しました。

アラ7(セブン)に位置しており、三日間の朝から晩までの長時間にわたる研修に耐えられるか不安でした。しかし指導員の皆さんの親切かつ興味深い教材による指導や個性豊かな研修生(若い人も多く驚いた)との交わり等により、楽しい時間へと変わっていきました。

今日まで山や自然が好きで登山や散策を通じて足元の草花に眼を向けるようになり、また40過ぎに厚別北に居を構え、野幌森林公園が目の前という好環境にめぐまれたことにより樹木や、鳥などにも興味を広げていきました。

「北海道の植物 野の花(上下巻) 谷口・三上」や「北海道の花/樹 梅沢俊ほか」などの本を買い求めて調べているうちに、多くの草花や樹木の名を覚えていきました。それから植物・動物、更には自然界全体へと広がっていきました。

また帯広で勤めていた会社で、「森林との共生・自然環境の保全」を目指したNPO法人(H14年)の立ち上げに関わったことで、よりボランティア活動や自然とのつながりが深くなってきました。

そんな折、野幌森林公園を中心とした自然ふれあい交流館の催しなどに参加しているうちに、ボラ・レンの名前に触れることがあり何かなと思っていました。

交流館を通じてボランティア活動に対する研修会があることを知り、参加を申し込み上記の結果につながったところです。

実質的な活動にはまだ参加していませんが3月下旬の行事から参加しようと思っています。

協会行事のお手伝いや先輩の方々の教を請いながら、活動参加者の皆さんと共に自然とのふれあいや自然環境の保全などに携われることを願っています。

そのためには先ず自身が自然をより楽しめるよう努力したいと思います。

怖そうだけれど多分?やさしい先輩の皆さん、ヨレタ新人ですがよろしくお願ひします。

眠り姫仮説

成田 伸一

これは童話の世界のお話しではありません。ワリキューレのブリュンヒルデや白雪姫の世界でもなく、土壌学の研究者の間の最新の仮設の事なのです。

一般に土壌学では、地表より 10m 位迄の深度が対象の研究で農学系、それ以上の深度については、地質学の範囲とされている様です。

これからのお話しは、植物の根廻りの範囲です。よくミミズが多く生息している土壌は肥沃だと云われて居ります。ゲジやダンゴ虫やダニの幼生を始めとする微小生物も生息しています。その他には菌類やウイルスも居ります。菌類の一分野には茸がありますが茸(きのこ)のお話しではありません。

一般に菌類には、納豆菌を始め青カビや酵母菌等が多種多様に存在して居ります。菌類が生存するには酸素が必要です。一方ウイルスの方は酸素を嫌います(嫌気性)。この性質が病気治療に抗生物質が使用されています。でウイルス菌と共生する事で生存し、単独では生存して居りません。

菌の仲間に根粒菌が早い頃より知られていましたが、これは豆科の植物のみに作用している様で最近確認された様です。此处で登場するのが菌根菌です。菌根菌は植物に対しチッ素を供給しその共生により植物より必要な栄養分を得ていて、植物の約 80% 強と共生している様でその名前は「アーバスキュラー」と云います。

これでやっと眠り姫仮設に近づきました。菌根菌の胞子が植物の根に接近すると、植物の根に変化が現られ、毛根の触手が、カギ状に伸びて胞子を巻込みます。その結果植物体全体に分けつ作用(成育が良くなる)が促進されるのですが、一足とびにそうはなりません。いよいよ主人公眠り姫が登場です。それは「ストリラクトン」というシグナル物質が介しなければこの現象は成立しないのです。

ストリラクトンが抗生作用する為にはある一つの過程が必要となります。この過程がないと眠り姫は永遠に眠り続ける事になってしまいます。この眠り姫を目ざめさせる王子様は誰か……………。

この状態は此处数年で研究され確認されました。去年の春にドイツの学会に於いても類似研究で確認発表され、国内では東北大、茨城大、横浜大でも実用化の研究がなされてます。で冒頭に出てきましたミミズ、ゲジ等の土を食用にする生物に依り食べられる事でその体内を通過すると眠り姫は目覚め増殖し植物と菌類の共生関係を促進していたのです。

自然環境と観光そして大地に感謝

ボランティアレンジャー 國 吉 守

札幌の自然をこよなく愛する一人として開拓時代の先人・先達の偉業を考えずに入られません、この度後世に残るであろう札幌駅前通地下歩行空間や創成川アンダーパス連続化親水緑地空間など相次いで完成します。

豊かな街づくり、市民の利便性、交通の緩和、商店街の活性化、経済の波及効果など新たな集客交流資源の創出になり、創造都市として環境にやさしく配慮された空間活用時代が到来します。

地下歩道は季節や天候に左右される事なくバリアフリーで年配者、車椅子、障がい者にもやさしく安心・安全・快適に地下街や地下鉄に直結往来する事ができるようになり創成川公園は水と緑の心やすらぐ憩いの広場として観光需要の創出ともなります。

遠大なる創成川の再生として自然が蘇える素堀りの運河「大友堀」が復活して生まれ変わり、舟遊びができ、大きな水車とすずらんの花園、柳の並木など水と緑の楽園ののどかな公園、豊平川を結ぶ大通公園東側の開発・旧市営バスセンターの活用冬は氷上カーニバルの会場になるような私なりの夢の構想案を描いて思い浮かべています。

日本三大の水郷の柳川と云うと「この道はいつか来た道、ああそうだよ、アカシヤの花が咲いているよ」と歌った北原白秋の生家跡のあるところで、お隣りが佐賀市で北海道開拓使初代長官鍋島直正・七賢人の一人札幌建設の父島義勇判官の出自したところです。

北海道神宮（札幌神社・開拓神社）にはご神体を持って来られた島判官が本道開拓の守神三柱を祭り、後に明治天皇陛下が祭られ北海道神宮に昇格しご神体を背にして島判官の像が立っています。島判官は開拓当初1年分の予算を3ヵ月で使い果たし更迭され、志半ばで札幌の地を去ることになり、その後佐賀の乱に加わり刑死したとき当時島判官の従僕であった福玉仙吉という人が判官の冥福を祈りエゾヤマザクラを境内に植えたのが、円山公園の桜の名所となっているのです。その円山公園内にも島判官の記念碑、その記念碑の碑を寄贈した人の記念碑もあります。更に札幌市役所本庁ロビーに島義勇のプロンズ像が立っており札幌建設の構想「河水遠く流れ山隅に峙つ 平原千里の地はこう沃なり 四通八達宜しく府を開くべし 他日五洲の第一都とたらん」と漢詩で詠んでおります。

一応、自然保護派の一人ですが何とも想像を絶する構想は驚天動地の限りで、開拓時代に懸けた象徴的な島義勇判官を讃え、敬う札幌人を誇りに感じております。

明治の初期赤レンガの北海道道庁旧本庁舎は威風堂々たる豪華な風格、長官室のドアや手摺にはヤチダモの玉杵・機械遺産の時計台は飾り気のない素朴な実用的な建造物で何れも重要文化財です。昭和初期の三大建造物は札幌グランドホテル・札幌市役所・中央警察署でしたが戦後の著しい復興そして近代になり札幌オリンピック冬季大会を期に道路の開削、交通網の改修・整備、札幌方式のゴムタイヤの地下鉄、夢の地下ショッピング街、超高層ビル・マンション群、オリンピック施設等がぞくぞく建設されて新し物好きの札幌人・ハコモノ行政と云われ自然破壊と揶揄されました。

今日では自然環境が叫ばれ、限りある資源を使い果たすのではなく生かして残す節度ある創意工夫の取組みはアイヌ文化から学ぶことが多いように思われます。

自然豊かであった環境の都心部も時代の流れとともに移り変わりアカシアの都・エルムの都……と云われ観光地として脚光浴びていた時代が懐かしく思い出されますが、

アカシア並木はニセアカシアと知りガツカリし、北1西5旧道立図書館前にエルムの大樹
チャチャニレの木（アイヌ語で長老の意）は惜しまれながら伐られ消え、大通公園6丁目
の鯨森の名称も忘れ去られ、カッコウの鳴き声も聞えなくなり、時計台の鐘の音もビルに
遮られ騒音で聞き取ることができず、詩の都の昔の風情はなくなりつつあります。

最近では身近な野山に小さな小さな心の癒しを求め小鳥の囀りを耳にして木花鳥を愛で時
には木の実を授かり楽しみながら山道を散策しております。

未だ、谷間に残る残雪を踏み締め、雪解けの陽のあたるところで時折々に水芭蕉・座禅
草・エゾノリュウキンカ・エゾエンゴサク・カタクリ・エンレイソウ・オオバナノエンレイ
ソウ「昏れるとき白き極みよエンレイソウ」一人静・白根葵等を愛でその間には春の息吹
行者にんにく・タラの芽・ウド「ひさかたの雪解けの水に滞れつつ春のものと摘みに来に
けり」等山菜採りに慈しみながら少々相伴して風呂上りの夕餉の酒のお供に美々なる味覚
を味わい、秋は山葡萄・コクワ等採る・作る・食べる・飲む楽しみの四重奏で大地の恵み
に感謝して悠久のひと時を過ごしております。

そんなある日、いつも通り過ぎる山奥の小学校跡千草屋に立ち寄って古風な木造の建物、
趣味の領域というべき陶芸の作業場、さり気なく置かれた陶器、五右衛門風呂傍らに石川
淑子著書「万葉に咲く北海道の植物」等興味をそそる書物がずらり棚に積んで、入口には
犬がいたが奥から如才のない女性が気さくに出迎えて、しきりにクレドールの臭いを気に
され、数日間家を空けて京都馬籠に旅行に行っていたので蛇よけに撒いていたとの事です。
喫茶店ではないがコーヒーを差し出されてこの地に母が住み、その女性もこの小学校に通
い愛着があり、今は札幌の自宅から行き来しているとのことですが最近すぐそばで、砂利
の碎石採集が進められ、騒音とともにダンプカーが行き交い、無残な山肌を表し丸坊主の
山ごと無くなることを痛み、この地を思いやる気持ちがひしひしと伝わり、話は尽きる事
がありませんでした。又の再会を楽しみにその場を離れる事にしましたが、この近郊の山
でも自然破壊される現実を目の当りに実感して驚愕の思いをしました。

今、自然環境と人の関わりの中でボランティアレンジャーの一員として試行錯誤の中、
蘊蓄のあるボラレンの有識者と自然ふれあい交流館のスタッフなど多くの自然保護・保全

に取り組まれている方々の温もりのふれあいに感謝して自らも行動したいと思ひます。
五感体験を通じて自然の素晴らしさ・美しさ・神秘さを童心に戻り遊び心で、野山を駆け
巡り自ら体感して自然から学びたい気概で一杯で楽しく細く長く続けたいと思ひています。
願わくは、自然と開拓の両立する社会を目指したいとここに環境首都・札幌宣言文の一部
抜粋したものを列挙します。

- 地球の様々な資源を大量に使い続け、命の源である自然界に深刻な影響を与えてきま
した。
- 今まさに、地球上に住む私たち一人ひとりが行動を起こさなければなりません。
- 厳しくも懐深い北の風土の中で、大らかで心豊か氣質を授かり、先人からは、自然の
中で生きる知恵とたくましさを受け継ぎました。
- 札幌の大地とここに生きるすべての生命、さらにこの美しい都市を築いてきた先人に
感謝し、愛すべきこの都をより良い環境で次世代へ引き継ぐため新しい道を創造して
います。
- 私たち一人ひとりが知恵と力を合わせ、勇気を持って行動します。 以上

自然界における糞「うんち」にまつわる話

ボランティアレンジャー協議会 宮本 健市

うんちは汚いものというイメージがあるが、動物や昆虫のうんちには重要な意味をもつものが少なくない。

エゾキウサギのうんちは、よく見かける丸く硬いうんちと、「軟糞」とよばれる軟らかいうんちの2種類がある。丸く硬いうんちは木を食べた残りかすのセルロースで、軟らかいうんちは木の皮などの部分を一度、盲腸で発酵させ分解したものを排泄し、それを食べ栄養を得ていて、うんちが命の糧である。

支笏湖の森を散策していてエゾヒグマのうんちを見たことがある。すごい量なので驚いた一抱えもあったらどうか。晩秋だったので中身はサルナシ「コクワ」やヤマブドウで良い香りがしていた。ほとんど未消化でサルナシなどは丸まんま排泄されていて、多量に食べなければならない訳や種子散布（森作り）に一役かっているなど納得したものである。

野鳥のうんちは糞と尿がいっしょになっている、空を飛ぶために膀胱を退化させたためである。幼鳥のうんちはゼラチンに包まれて親鳥が巣から運び出すときに嘴でくわえやすいようになっている。

また、野鳥の多くは植物の実を食べ種子散布（森作り）もしている。野鳥が食べた種子は発芽率が極端に高まる、また、腸が短い（空を飛ぶため短く退化）ため栄養分が未吸収のまま排泄されて、まさに肥料付きの種子散布であり、森作りには大いに貢献している。

変わったうんち???では猛禽類（タカやフクロウ）、カラス、モズ、カワセミ、カモメなどのペリットがある、捕食した小鳥や小動物の骨、魚の骨、羽根、毛、甲虫の硬い殻など消化できないものを口から排泄する。ペリットの主が、なにを食べたか有力な情報となる。フクロウのペリットなどはネズミの骨が一体分そろいなかなかおもしろい。

オーストラリアなどに生息するコアラの赤ちゃんは母親のうんちを食べる。そのうんちには食物とするユーカリの葉を分解するバクテリアと葉に有する毒を分解する解毒剤が含まれる。

よくフィールドを歩いているとエゾタヌキの溜め糞を見かけることがある、エゾタヌキは溜め糞をすることにより仲間の健康状態をお互いに知らせ会っているという。嫁さんに行った娘も里帰りして溜め糞に参加するという。

キタキツネなどは自分の縄張りを誇示するために、わざと目立つ木の切り株の上や大きめの石の上、道の真ん中などに堂々と置いてある。

昆虫とうんちはどうだろう。昔オーストラリアに牛が導入されたとき、牛糞を分解する昆虫がいなかったため牧場に乾燥した牛のうんちが堆積し、荒廃したがうんちを分解する昆虫を放したところ回復したという。

春にはエゾシカのうんち（見慣れてくると雄、雌、子と分別することができる。）が、あちこちに目立つが、うんちを分解する昆虫が出現し出すと一夜のうちになくなっていることに気づく、これはダイコクコガネ、ツノコガネ、オオマグソコガネ、ヨツボシマグソコガネ、マグソコガネ、オオフタホシマグソコガネ、センチコガネなどの活躍によるところが大きい。センチコガネなどは「雪隠黄金」と書きまさに、うんち専門家である。

昆虫そのもののうんちは食べる物により千差万別で液状から固形、大きさ、形、色と多様である。特に植物を食べる昆虫のうんちは、その植物のさまざまな色合いが出現して、それを染色剤としてスカーフなどを染め「糞染め」なるものを作り販売していて、なかなかしぶい色合いをかもしだしている。

また、カイコのうんちは「蚕沙」（さんしゃ）とよばれる漢方薬となっていて、高血圧などの薬として利用されている。

中国では、ある種のガのうんちをお茶として飲んでいてビタミンやミネラルが豊富にふくまれていて、昔から健康茶として愛飲されているらしい。

街路樹の下を歩いていると歩道にバラバラと黒い粒状の物が落ちていることがある。毛虫や芋虫のうんちである。よく見ると種によって形などさまざまに慣れてくると見るだけで種が同定できて実におもしろい。「たかがうんちされどうんち」である。一度じっくり観察されてはいかがでしょう。

参考文献 木野田 君公：札幌の昆虫 北海道大学出版会 2006

北 海 道 の 自 然 を 知 る

Graphic of Hokkaido's Nature ファウラ

faura

2011春号
(通巻第31号)

好評発売中！
NOW ON SALE

定価 1,000円(税込)

[特集] 春の花を見に行く

道内各地の「春の野の花」観察スポット27選を徹底紹介

- ミズバショウやカタクリの有名群生地からキタミフクジュソウ、ヒメアマナ、エンゾオオイスミレ、コジマエンレイソウの観察地まで●野の花マスタ―「うめしゅん」のワンポイント●隔離分布・雑野のカタクリ
- 人々が作り上げたサクラソウの新しい群生地●うめしゅん（橋沢俊）の観察用具●グラフ「雪どけ、野の花、春の飲み」(新橋比左夫) ほか

【好評連載】 袖田美野里「礼文島から～野の花が好き」/ 篠澤レイ「野の花を描く」/ 中島宏章「蛸蟻王国北海道」/ 河井大輔「ファウラ博物館」 ほか

編集・発行 ナチュラルリー 0120-4646-13

———書店のほか上記フリーダイヤルでもお求めいただけます———



2010年 今年出会った植物から 思うままに

平取町 川村 桂介

1. 仁世宇の沢の支流域で クシロワチガイソウと久しぶりに出会う!!

仁世宇の調査に入って、これまでは仁世宇川の川なりに造られた林道の周辺しか歩いていなかったのですが、今年は仁世宇川に流れ込む何本かの枝川に入ってみた。山の奥に入る時は、熊除けの鈴の他にジュースの空缶の中に小石を入れてそれを振り、ガランガラン音を鳴らしながら歩くのであるが、独り歩きは正直言って不安である。しかし、何か新しい植物に一つでも出会えたらという期待感に支えられ、護身用に鎌も持ちながら川を上っていったのであるが、以下のような花に出会うことができた。

クシロワチガイソウ、エゾノジャンジン、コキンバイ、ミヤマキヌタソウ、ケオオタチツボスミレ、オオホタルサイコ、キオン、キイトスゲ、ヤマルリトラノオ、モミジカラマツ等である。

《 クシロワチガイソウ 》

30年前頃は町の周辺の林の中でも時々出会することがあったが、その数が段々少なくなりこしばらく見ていなかった。小沢沿いの山の斜面にシラオイハコベ（エゾフスマ）が固まって出ている、その岩場にクシロワチガイソウが2～3本寄り添ってひっそりと生えていたのである。15cm程の細い茎には、柄のない線形の葉を重たそうに付けていた。対生の葉で長さは8～12cmもあり、茎の高さや花の大きさに比べてややアンバランスに思うのであるが、それが特徴である。また茎下部の節にはあずき色の閉鎖花も数個付ける。絶滅危惧種である。嬉しい出会いであった。

《 エゾノジャンジン 》

日高町にいた時は小沢や溪流沿いでよく見かけたのであるが、平取町では初めてである。林縁の地下水のしみ出た水たまりや水の滴る岩場などで見られる。これも絶滅危惧種で日高山脈特産でもある。葉は奇数羽状複葉で小葉は4～5対付いていて披針形で先が尖り、花はオオバナネツケバナのものよりやや大きい。押して標本にすると収まりがよく、先の尖った小葉がアクセントになりきれいに仕上がる。

《 ケオオタチツボスミレ 》

5月中旬に行った時に見つけたのであるが、山林が伐採されて明るい広い草地になっている所に群生していた。唇弁の距は白色で葉は円みがやや強く、花柄は茎頂や葉腋から出し根本からは出さない。このものは茎や花茎や葉脈に毛のあるケオオタチツボスミレである。タチツボスミレは6～7月頃まで花を見ることができ、それより花期は遥かに短く、5月の末にはもう見るができなかった。

《 キイトスゲ 》

オオイトスゲに似るが、オオイトスゲの地下走出枝が白色であるのに対して基部の鞘や鱗片とともに地下走出枝も黄色や黄褐色を帯びる。しかしオオイトスゲも完熟してくると、鱗片等はいくらか黄ばんできて、鱗片だけではなかなか区別しづらくなってくる。高橋誼先生によると、オオイトスゲをシロイトスゲとも呼ぶ（地下走出枝が白色だから）ことから、オオイトスゲの変種としてシロイトスゲ、キイトスゲがあり、それらを総称してオオイトスゲとする人もいるとのことであった。オオイトスゲはイトアオスゲとともに多く見られるが、キイトスゲは少ない。

2. 幌尻岳の麓 額平川上流域で

超塩基性岩や石灰岩上だけに生育する植物たちが……なんとアボイカラムツも!!

M氏からウメバチソウの写真を撮りに額平川の上流辺りまで行くので、もしよかったら一緒に行かないかと誘われ、同行させてもらうことにした。私は豊糠の奥の方にはまだ一度も行ったことがなかったので、どんな花に出合えるか前日から楽しみであった。

《 トモエソウの大群落 》

車で豊糠まで1時間、そして更に凸凹とした砂利の山道をとろとろと1時間ほど走った辺りにトモエソウの大群落が広がっていた。トモエソウには、今までは林道等ではつんと1~3本生えているのを見てきてはいたが、このように群生しているのを見るのは初めてであった。しかもこのものは半端ではないのである。そこは近年山林の伐採が行われ草地になったと思われるところで、大きなハンゴンソウと混り合っており、びっしり生えていた。トモエソウもこんなに大きな群落を作るのかと、まずは驚いた次第である。

《 ウラベニダイモンジソウ 》

山道の車止めのゲートから、2~3Km上っていく程に山側の岩場に目的のウメバチソウが可憐な花を見事に咲かせていた。そこにはダイモンジソウもあちこちに生えていたが、小型で葉の裏全体が濃い小豆色をしているのである。普通に見られるダイモンジソウでも葉の裏がほんのり赤く色付くことはあるが、それとは雰囲気全然違うのである。杉本順一の検索図鑑には、葉の裏が紅色になるものをウラベニダイモンジソウというであった。

《 エゾウメバチソウ 》

また、このウメバチソウは、仮雄薬が9~13個で全体的にやや小振りのエゾウメバチソウであった。ウメバチソウは、仮雄薬が15~22個である。

その他、山道の行き帰りに道端や岩場で見られた花は次の通りである。

エゾオトギリ、ハイオトギリ、アボイタヌキラン（日高準固有種）、ヤマリトラノオ、カワラボウフウ、ヒメアカバナ、アボイカラマツ（アボイ固有種）、トカチトウキ、ミヤマトウキ、イワキンバイ、ヒメナツトウダイ、ミヤマモジズリ、アボイゼキショウ（チャボゼキショウ）、イワヨモギ（北海道固有種）、エゾトウチソウ（日高山系固有種で崖の斜面に群生）、エゾアジサイ等

《 アボイタヌキラン 》

初めて見るスゲだったので採集して調べてみたところ、果胞の嘴の先は2裂していて針状で開出し柱頭は長く長くして宿存性、そして果胞は果を密に包みこんでいるものであった。図鑑にはアボイタヌキランの項目はなくコタヌキランに行き着いたが、疑問点もあり高橋誼先生に見ていただいたところアボイタヌキランであった。違いは、下記のとおりである。日高山脈準固有種で、胆振でも稀に産するという。また、アボイタヌキランは、タヌキランとコタヌキランとの雑種とある。

コタヌキラン ・ 果胞と果はやや扁平で狭卵形で柱頭は2本。

アボイタヌキラン ・ 果胞と果は3稜形で柱頭は3本

《 アボイカラマツ 》

チャボカラマツのつもりで採集したのであるが、双眼実体顕微鏡で覗いたところ葉の裏にまばらに腺毛があり、葉の色も青緑色をしているアボイカラマツであった。アボイ岳固有種になっているアボイカラマツが、アボイ岳から遠くはなれたこの額平川の上流域にも出ていいのだろうか？ いや、やはりチャボカラマツなのかな？ との思いがあり、アボイタヌキランとともに高橋誼先生にみてもらったのであるがアボイカラマツに間違いないとのことであった。

アボイ岳にしか出ないと思っていたものが、額平川の上流域にも本当にあったのである。この辺りの地質はアボイ岳のものと同様に石灰岩やカンラン岩質のものでできているのであろう。7月の下旬と8月の中旬に1回ずつ、しかもゲートから2～3 Kmの範囲の山道を往復2時間程歩いただけなのに、このようにアボイ岳周辺に生育している植物やいろいろな高山植物などにも出会えたのである。詳しく調査したら、他にも超塩基性岩や石灰岩上に生育する変形植物や日高山脈特産の植物等が、そしてアボイ岳固有種と思われる植物等もひょっとしたら出てくるのではないだろうか。

幌尻岳に続くこの山道は、例年道路の除雪や崖崩れの復旧作業等が5月の末頃までかかり6月にならないと通れないことが多いのである。来シーズンは道路整備が終わり通れるようになってから10月頃まで各月何回か行って見て、時間をかけて調べてみようと思うのであるがどんな植物が出てくるか今から楽しみである。体力が衰え高い山に登ることができなくなった私にとっては、山に登らずして麓でこんなに多くの

高山植物に出合えるだけでも大きな魅力である。

3. 市街地周辺で

市街地周辺では、ホトケノザ、アオゴウソ（ヒメゴウソ）、キヨスマウツボ、アメリカホドイモ（帰化植物）、シカクイに新しく出会うことができた。

ホトケノザは、紫雲古津のゲートボール場の周辺で見られる。門別の賀張小学校の花壇の周辺にも広がっているのを確認していることなどから、これは花壇に植える園芸植物に付随して持ち込まれたものと思われる。

アメリカホドイモとキヨスマウツボは、変な花が咲いているので見に来て欲しいとの電話があり行って確認したものである。キヨスマウツボは、半寄生植物でサクラやハンノキなどのそばに出るとある。

カヤツリグサ科では、アオゴウソとシカクイに出会うことができた。シカクイは、稈に普通4稜があり、やや灰白色を帯びた緑色で、刺針状花被片は密な羽毛状をしている。刺針が羽毛状になっているハリイの仲間、シカクイ位である。アオゴウソは、ゴウソの頂小穂が雌雄性なのに対して雄性で、雌小穂はゴウソより細くて長い。またヒメゴウソというようにゴウソよりやや弱々しい感じである。

	頂小穂	雌小穂の径	雌小穂の長さ
ゴウソ	雌雄性	10 ~ 14mm	2 ~ 3.5cm
アオゴウソ	雄性	5 ~ 7mm	2 ~ 6cm

以上が今年新しく出合った植物やあるいは久々に出合った植物達である。

追記

ずっと以前に、日高のサンゴの沢で茎に白い開出毛を密に付けたヨモギを見つけたのである。しかし、図鑑にもそれに該当するものは無く分からないままでいたのであるが、サンゴの沢に限らず他の所でも結構目にしていたのである。今年、高橋先生とニセウの沢にナルコスゲやアズマナルコなどの写真を撮りにいった時にもそのヨモギが生えていたのである。先生に見てもらったところ、それはエソノユキヨモギだとのことであった。ずっと気になっていたヨモギであった。

また、エンコウソウもずっと以前に富川のおコタン川で見ていたのであるが、6月の平取自然愛好会の活動日にそこへいったところ、黄色い花を付けたエンコウソウが蔓状の花茎を地面を這うように長く伸ばし、ミズバショウやオランダガラシ等とともにまだ群生して残っているのである。これまた収穫であった。管内ではエンコウソウをここ以外ではまだ確認していない。

(2010.12.10)

記憶と省察

ヤーン・カプリンスキ著
清水 利章 訳

生まれてから3歳近くまで、私は公園と10エーカーの庭に囲まれた祖父の家で暮らしました。その小さな楽園を去らなければならなかったことを含めて、私のはっきりと憶えているのは2歳半だった1943年の夏です。したがって、いくらか昔の記憶まで遡らなければならぬのは確実です。

あるすばらしい夏の日のことでした。おじいちゃんはいくつか蜜蜂の巣箱を持っていて、蜜蜂を見せるために私を連れだしました。ところが、一匹の蜜蜂がブンブン飛んできて、私たちはあわてて逃げだしたのです。

ある曇った日のことです。陽の光はどんよりとしていて、私のまわりの空間にはメンランコリーが満ちていました。そして、私の心は悲しみに沈んでいました。

家のそばに井戸があって、家のなかにはかなり大きなポンプがありました。その井戸に絶対に近づかないように言われましたが、どういうわけかその井戸が私を誘惑し、私の魂を奪いました。

近所に砂礫（されき、特に砂金を含む）の採石場があって、そこにひとりの少年が住んでいました。少年の父親も祖父も砂礫に押しつぶされて亡くなりました。そこで遊んでいた少年を救おうとして、ふたりの男は大急ぎで駆けつけたのですが、残念ながら非業の死を遂げてしまったのです。私はその砂礫の採石場に連れていかれ、その話を聞かされました。おそらく私の失われた意識がふたたび呼び覚まされたのは、そのときだと思えます。お昼過ぎになると、私はお昼寝をしなければなりませんでしたが、お昼寝なんかしたくありませんでした。どうしても寝入ることができなかったのです。ところが、祖母の姉妹のひとり（全部で7人姉妹でした）の伯母さんだけは、私を眠らせることができました。

1943年の最後の数か月に、ドイツ軍は我々の家を没収しました。その家は、郊外の公園によってうまく隠された安全な場所にありました。彼らは町の真ん中にある大きなフラット式の共同住宅に我々をぶち込みました。そこは彼らの軍事施設としては、すでに極めて危険な場所として考えられていました。私にとってそれは、楽園からの追放を意味しました。その翌年には、我々はシェルターで過ごさなければなりませんでしたが、接近している前線から身を隠すためです。我々がぶち込まれた家は砲撃で罹災し、すべての本、手

工芸品、家具が壊されました。楽園から、まるで地獄のような場所に我々は追いやられたのです。母と私は町をでて、親戚がいる田舎で数か月を過ごしました。今では、それが我々の命を救ったと思っています。

町では警報が鳴りだすと、母と私を寝かせてくれた伯母さんが大きな洗濯かごのなかに眠っている私を入れ、比較的安全な場所だった地下室へと運びました。我々はまた、本物のシェルターのなかで数日間、過ごしました。そこにはたくさんの子どもたちがいて、とても刺激的でした。大人はいつも、それほど忙しいというわけではなく、腰をかけて面白い話をしてくれました。

町を離れるまえに、当座しのぎの防空壕として過ごしてきた地下室の持ち物の一部を捨てました。我々が戻ったとき、その家はすでに焼失していましたが、地下室と家財道具だけは無事でした。とはいえそれは、ものすごい熱のために損傷を受けていました。いくつかの中国の茶わんは、わずかに溶けていました。私はそのとき地下室にいなかったことを思わずにはいられませんでした……。私はちょうど5か月の赤ん坊のとき、父を失いました。父はタルトゥ（ソ連邦Estonia共和国の中等部の都市）大学でポーランド語と文学の講義をしていました。ポーランド当局によって、そこに派遣されたのです。父はソ連秘密警察（NKVD）によって捕らえられ、ソ連集中収容所（GULAG）で消されました。私は父の逮捕および尋問に関するいくつかの証拠書類を調べましたが、父の死については何も記されていませんでした。公式には、父はひとりのポーランド市民として自由の身にされるべきでした。そして、ソヴェート社会主義共和国連邦（USSR）から戻ることができたはずなのです。ところが実際には、おそらく父は疲労し餓死するまでひとりの無名の奴隷として、強制収容所に閉じ込められていたのです。いく人かの人とその強制収容所で父に会いました。そのことによって、私は父の人生の決定的な最期を知ることができました。残念なことに父の死に関する顛末は、各人各様に異なっていたのですけれどもです。

もし父が生き延びていたならば、我々はポーランドあるいは西側の国へと移住し、おそらくエストニア人にはならなかったと思います。

戦線が我々のうえを通過したあと、我々はタルトゥに戻り、生活するための場所である大きなフラット式の共同住宅の二部屋を見つけました。そこにはほかのいくつかの家族がいっしょに住んでいて、台所や浴室は共同で使わなければなりませんでした。我々はその共同住宅を「我がコルホーズ（ソ連の集団農場）」と呼びました。その共同住宅には多くのさまざまな人びとが住んでいました。私は彼らのふるまいを観察することができ、彼らの話や歌を聴くこ

とができました。人によっては大酒を飲み、そのとき以来私は大酒飲みが大嫌いになりました。

私は病弱で、感じやすく、夢見がちな子どもでした。ほんとうに小さな子どもの頃から肉を食べようとはしませんでした。まるで仏教徒になる準備をしているようにです。動物が殺されたり傷つけられたりすると、私は激怒し落ち込みました。

私はよく病気をしました。熱がでて横になっていると、奇妙な感覚と感情におそわれることがありました。それは、自分の体がさっと消えるような、スペースがさっと消え失せるような感覚で、奇妙なリズムが頭のなかで乱打するのです。あなたがもしそうしろと仰言ったならば、宗教的な瞑想に至るまでの準備としていたことでしょうかね。

4歳のときにおじいちゃんが、私に読み方を教えてくれました。私には兄弟も姉妹もなく、たいていひとりぼっちでした。戦争や冒険や人気のある科学の物語が好きで、私はたくさんの本を読みました。おそらく私がいちばん読んだのは、おじいちゃんの8巻のエストニア語の百科事典ではないかと思います。

4歳のあるときのことです。私は共同住宅のソファにすわっていました。空は曇り、メランコリーが空中にも漂っていました。私はそこにすわり、なぜメランコリーは起こるのか、なぜ私は私であり、なぜ私はJ. K. なのだろうか、と不思議に思いました。自分の存在に関するひとつの疑問としての不安を、私は明確に述べることはできませんでした。そればかりではなく、ほんとうに私はそれに対する答えを見つけだすことができなかつたのです。脈絡のない疑問が、そのとき以来私を悩ませ続けました。そしてそれが、私を仏教へと導く唯一の推進力となったのです。そのほかにも私は、いくつかの哲学上の疑問を抱いていたのですが、後に仏教哲学で扱われているものから、その答えを見つけだすことができました。私がもし青めがねを掛けて、あらゆるものを青とみなしていたならば、その青はほんとうの青だったのでしょうか、それともほんとうの青ではなかつたのでしょうか？ ちょっと青ではない色が含まれていても、その色は青であるという感覚を私はそのとき以来身につけました。青は単にほかの色との対比のうちに存在するに過ぎないので。ナイフの刃を見てください。それがどのように切っ先へと続いているのだろうか、と私はいつも考えていました。我々がもし刃先の方へ移動すれば、そのナイフの刃はだんだん鋭くなります。まさに鋭さは限りなく、鋭くなるのです。従って、鋭さに関しては限界が存在しないのです。それゆえにナイフの刃に関して、制限は存在しないのです。それでは、ナイフはいかなる鋭い有限の刃を備えるのでしょうか？

伯母さんが我々を訪ねてきます。伯母さんがくるのを、私はいつも心待ちにしています。私がいい子であって欲しいと願う母のためにもです。おばちゃんは私にキャンディーをくれます。たとえキャンディーをもらうためにどうにか礼儀にかなっていたとしても、おまえはほんとうにはいい子ではないんだよ、とおかあちゃんは言います。私は悲しく思い、どうしたら少しでもいい子になれるだろうかと考えます。私にはわかっていたのです。キャンディーをもらうためにいい子ぶっていたことを。私はそのことを決して忘れることはできません。報いのもたらされる美点は、ひよっとすると真の美点ではないのかも知れないのです。けれども、いかにして代償という妄想から自らを引き離すことができるのでしょうか？

すごく厭なこともちよっとありました。彼らはエッチな話をひどく嫌い、タブー視したのです。セックスの話はみだらでタブーでした。死と拷問に関する話もまたタブーでした。このタブーの話のなかに、ある不思議な魅惑がありました。だれも見えていないときに私はいつも、百科事典から性器やセックスについての項目を見つけだしては、読みふけりました。おかあちゃんのフランス語の百科事典や「吊された人」の詩を含むフランソワ・ヴィヨン（フランスの詩人）の一卷を持ちだしては、テーブルの下の人目にふれないところでその本を読んだのです。私と私のクラス仲間は、女性の性器の解剖学的構造について詳細に議論しました。我々はそのことについて、もっと知りたかったのです。庭の塀に小石で描いた絵を用いて我々の持論を展開しました。おかあちゃんはそのことを知ってかんかんになり、私を罰しました。田舎の親戚の家で、私は夏じゅう過ごさなければならぬハメになったのです。そこは文字どおり極めて困難な時代にありました。コルホーズ（ソ連の集団農場）はますます貧しくなり、人びとは彼らの私有の乳牛と小区画の土地だけにかろうじて生き延びているという有さまでした。それでも私にとって、町にいるよりそこにいる方がずっとよかったです。その田舎で、私は失われた楽園のかけらときらめきとを、再び見いだすことができましたのですから。木や、草や、鳥や、犬や、猫、そして静寂を私は見つけることができましたのです。小さな農家の近くには、ほとんど隣人はいませんでした。けれども、おばあちゃんの妹の亡くなったご主人によって残された、たくさんの本がありました。ご主人は、教師と地方のユダヤ教会の礼拝式の主唱者をしていたのです。文学的な雑誌から、教会の小雑誌、女性雑誌、飼鳥類の育成に関するハンドブックに至るまで、ことごとく私は読みました。それが私のサマースクールだったのです。それが私の学問探究の主たる源泉だったのです。

13歳になるまで私は、詩に興味がありませんでした。その後、

祖国に祝福をもたらしたナポレオンの肖像によって、ロシアの詩人レールモントフの詩をたまたま読む機会がありました。それは実に思いがけないことでした。私は涙を流し、そしてあこがれの彼の地の詩人たちへの長い旅に出発したのです。私の最初の先生はロシアとイギリスのロマン派の詩人たち、レールモントフ、プーシュキン、シェリーでした。つぎの先生は、エリオット、ボードレー、ランボーのようなモダニストたちでした。そのつぎの先生は、民族音楽詩でした。最新の詩で、極めて強く衝撃的だったのは、極東生まれの、特に中国の伝統的な詩でした。詩経から陶淵明（とうえんめい）に至る中国の最も初期の詩のアンソロジーに、いま私は取り組んでいるところです。若いころ、私はたくさんの俳句を作りました。短歌もです。エストニア語の言葉の特質に、その短詩型は実によく合う表現形式だったのです。

私は、夏の家で時間を過ごすのが大好きです。近所にはほとんど人が住んでいない古い農家で、たくさんの木があり、動物たち、ビーバーや熊さえ近くに住んでいるのです。私は今、いわゆる大家族を経験しています。そこには、16歳から33歳までの5人の子どもたちがいます。私の妻のティヤもまた作家で、彼女はテキスタイル・アートを学び、現在はタルトゥおもちゃ美術館のディレクターをしています。

私の趣味のほとんどは、自然と関係があります。私は木を植え、すでに容易に森へと転ずることができるほどの、いわば私有の公園を持っています。極めて奇妙で激しい私の秘密の思いのひとつは、遠い島に対する思いです。例えば、フオーランドや、ケルゲレンや、セントポールのような南の海の南極圏に接する島々へののです。

私は言語学と哲学を研究しています。私の好きな思想家は、ヴィトゲンシュタインと莊子（中国の古典的な道家）です。私はこの両者を結びつける可能性を発見しました。ドイツの作家で哲学者でもあるフリッツ・マウトナーは、ドイツ語の翻訳で莊子を読んでいて、たいそう気に入っています。また、ヴィトゲンシュタインはマウトナーによって影響されたのです。

西側の考え方における現在の状況を、私は不幸に思っています。政治上と精神的な感覚の両面において、“ヨーロッパの要塞（小規模なアメリカの要塞）”を構築しようとする強い傾向が見られるからです。それは、世界の文化を我が邦と異邦とに、明らかに分断しようとするることなのです。私の好きな詩人や哲学者たちは、今日のヨーロッパにおいては、たまたま異邦人たちです。私もまたここでは、いよいよ異邦人となっていくます。私はおそらくアジアにも属さず、愛情をよせている極東の詩人や思想家たちとも、決して同じ国の人間ではないけれどもです。

西洋の精神の不幸の根源は、言葉によって世界を限定された考えを有する社会のようにみならず、ある意図的な傾向が見られるところにあります。境界線を意味する定義づけに関するその信条を明確にすることは、ボーダーラインを引くことにほかならないのです。喜怒哀楽の感情や考え方が、境界線によってはっきりと分けられ、決まってゆくということは現実の世界においては、ほとんど存在しないのです。現実の世界を明確に線引きするということは、一種の冒流行為なのです。一種の強姦なのです。哲学者や詩人のする仕事とはほど遠い、一種の殺人なのです。違いは存在します。けれども、その違いは必ずしも境界線ではないのです。暑いと寒いの間には違いが存在します。光明と暗黒の間には違いが存在します。青春期と老年期の間には違いが存在します。小さいと大きいの間には違いが存在します。人間と動物の間には違いが存在します。けれども、その違いは段階的なものであって、ほとんど境界線は存在しないのです。世界にはさまざまな違いが存在します。とはいえ、それと同数の境界線が存在するわけではないのです。

私は、自らを明確に定義づけようとはしません。人間を明確に定義づけるということは、徹底的な調査がなされるということなのです。明確に定義づけるということは、徹底的な調査を必要とするということなのです。ひょっとしたら間違っているのかも知れませんが、私はそのような感覚を抱えています。極東のあなた方は、自分を明確に定義づけようとはしないですね。あなた方は、たとえ自分に与えられた責務を果たしながらであっても、心のなかだけは、光のように、闇のように、あるいは風のように、移りかわるがゆえに自由なのですよね。それこそが、私にとっての自由なのです。それこそが、浮かんでいる雲や、池のなかで泳いでいる小さな魚を観察し、写真に撮るのが好きな人にとっての自由なのです。

2年ほど前のことです。春に、私は田舎の家の近くで二羽の鶴と出会いました。鶴は心のなかでハッとしたのでしょうけれど、ダンスのような動きをして見せてくれました。私は仏教徒のお辞儀で鶴をお迎えしました。鶴は飛び立とうとはしませんでした。そればかりではなく、そのうちの一只が私と同じようなお辞儀をして、私の挨拶に応じてくれたのです。そこで私は、手をゆっくりと羽根のようにゆり動かして、ちょっと踊るようなしぐさをしました。すると、鶴はそれにも応じてくれたのです。ほんとうに私は幸せな気持ちになりました。自然が、迷った息子のうちのひとりとして私を受け入れてくれたのではないかと思いました。白石かずこさんが、私の詩に関するエッセイを書いているんですよと仰言って、ぜひ一度日本へいらっしゃいと私をお招きしてくださったとき、私はそれと似たものを感じました。それは、私のお辞儀に応じて、私を受け入

れてくれたアジアだったからではないでしょうか？

2008年10月2日（木）

Jaan Kaplinski（ヤーン・カプリンスキ）。1941年、エストニア・タルトゥ生まれ。ヨーロッパの一部をしめているエストニアという場所に住みながら、ユダヤ系ポーランド人の血をひき、しかも心は東洋に、殊に仏教に向かっているエストニア文学の〈黄金の60年代〉を代表する詩人・翻訳家・エッセイスト。

「記憶と省察」は詩人白石かずこの『詩の風景・詩人の肖像』（書肆山田）のなかで、ヤーン・カプリンスキから彼女へと送られた手紙として、その抄訳が紹介されている。これはその全訳である。

なお、ヤーン・カプリンスキにはエストニア語と英語による自身のウェブサイトがあり(<http://jaan.kaplinski.com/>)、この「記憶と省察 (Memories and reflections)」も読むことができる。

≧ 第26回 定期総会の案内 ≦

- 1 日時 平成23年4月16日（土）
- 2 場所 札幌エルプラザ 2階 環境研修室1 北8西3
- 3 日程
 - ・受付 13時から
 - ・研修会 13時30分から
「ボラレン小樽支部活動十年—前田一步賞を受賞して」
講師 ボラレン小樽支部長 北原 武
 - ・第26回総会 15時～16時30分
 - ・総会終了後 懇親会
場所 「北のささや」 北7条西1丁目
NSSビル地下1階

支笏湖畔の観察会

苫小牧市 谷口勇五郎

8月15日、支笏湖畔で自然観察会がありました。コースは休暇村の園地から野鳥の森の観察路です。当日はお盆で、雨も降り出し、足元を気にしながらの散策で、傘を差す場面もありました。このコースには特別珍しい植物があるわけではありませんが、その時観察された幾つかを紹介します。



ヤマジノホトトギスの花(実物大)

エゾアジサイ(ユキノシタ科の低木)の飾り花は青紫色のはずですが、もうすっかり色があせたためか、茶色でした。

アマニュー(大型のセリ科)の花の咲いたあと、果実になるべき部分が、直径6~7mmの球形(緑色)のものになり、いくつもあります。「これは虫こぶ(ゴール)ですよ」と、ルーペで見てもらいました。その虫こぶを作った虫(ゴール形成者)は、ハエ類かハチ類なのかは分かりません。「こんなに虫こぶだらけでは種(たね)ができないのじゃないの」「虫こぶの部分は種が出来ないでしょうが、虫こぶが作られていない部分もあるし、虫こぶのないものもありますよ」。その部分にゴール形成者の卵が産み付けられ、孵化し、幼虫の摂食か吸汁などの刺激により、植物が異常に成長して虫こぶができます。その中で幼虫は周りを食べて成長するといいます。虫こぶを作ればその虫はいくらか、天敵から保護されるでしょう。

オトコエシ(オトコエシ科)は花盛りでした。根元から白っぽいランナーを伸ばし、栽培イチゴのように新しい株を増やしているのが見えます。新しい株はせいぜい10cmぐらいの高さでオトコエシの傍らにあり、まるで別種のように見えます。オトコエシの実にも直径1cm程の虫こぶが少しありました。この虫こぶの名前はオトコエシミフクレフシとかいい、ハエ類の仕業なそうです。

イヌヨモギが花茎を伸ばし、目立たない花を咲かせています。そのそばに横向きの別の低い茎(栄養茎)は花を付けず、ロゼット状にサジ形の葉をつけていました。

最後にヤマジノホトトギス(ユリ科)がありました。花のつくりは少し複雑で、上部にある花柱が横に伸び3裂し、更にその先が2裂、雄しべが6個あります。下方に6枚の花弁、その根元に蜜があり、マルハナバチが吸蜜するとき、背中が花柱や雄しべに当たり、受粉に役立つといいます。細長い三角錐のような果実(長さ3cm)も幾つか作られていました。

虫といえば、雨模様のため、シロオビクロナミシャク(シャクガ科:昼活動のガ)がヒヨドリバナやカノツメソウの花で数回見られたただけでした。

北の芸術家シリーズ③—この大地、海をどう表現してきたのか。木田金次郎の
世界

海を主たるモチーフとして自然の実相を描きつづけて

広報部

郷里・岩内で海、漁場、原野などを描きつづけた孤高の芸術家、
有島武郎の小説『生まれ出づる悩み』の主人公、木田金次郎。

木田のごく初期の作品には、青空のなかに、ポプラなどの樹木の存在を強調した風景絵画が多かった。ところが、10代の後半から家業を引き継いで漁師（木田の表現）としての生活を通して画風は大きく転回している。それまでは、樹木、山、風景などをテーマにしてきたが、それらに代わって「海」がモチーフとなる。その端初となる作品が1936の「海」であり、1942年同名の「海」である。前者は西の空に沈む夕日を劇的に描いているし、後者は夕日と思われるが明るい色調で流動的に表現されている。このように、木田にとっては「海」が本格的なテーマになり「河畔の漁村」「晩秋のホリカッパ」、「断崖」シリーズ—残念ながら岩内の大火で焼失—につながっていく。

更に、台風による岩内大火後の作品「大火直後の岩内港」につづき後期の傑作「青い海」、「波」、「岩内港」などにつながっていった。晩年の作品群は、木田が言うように、海との関わりは象徴的なものになっている。

木田の作品は、海、自然などを静的で美しく描くのではなく、たえず変化しつづける動的のものとして自然の実相に迫ろうとするものである。

それは、彼が漁師として、静かな波間での漁（りょう）もあっただろうが、荒波に翻弄され、生命の危機を感じたことも多かったようである。木田は「漁場の生活」—有島武郎の思い出、習作の一部—のなかで、暴風に翻弄され、それに立ち向かっていきながらも、小さな人間の前に、自然はあまりにも大きな暴力をふるう、ということを記している。



海 1955 (昭和30)

こうした若き時代の漁師としての仕事、生活が動的な自然の実相に迫る作品を作りだすことになった。

《木田の回想から》(1)

「海が私の画因の対象として、生き活きと動きはじめたのはそれから間もなくで、

そこに怒号と沈黙の現象のかけに、自然の実相を探っていこうとしているが、把握し表現する画の道が、いかに困難なものであるかを今更に感じている」(昭和28年「道新」)。漁師として、画家として半生を回想したこのコンセプトは、彼の背骨となっていると思う。彼が、台風による大火災で約1500の作品を焼失した後の作品、太陽もその色調を失い、怒号の海、それに晒される漁場を描いている「大火直後の岩内港」はまさにそれを証明している。それにつづいて「ノサップの灯台」、「岩内港」、「茶津の断崖」などの秀作がある。

その後、木田は海そのものを中心的なテーマとするよりも、海と関わる漁場、漁村、樹木、馬、風景など表現していくことになった。いわば、海を背景しながらも静かに深く自然の実相にせまっていくことになる。

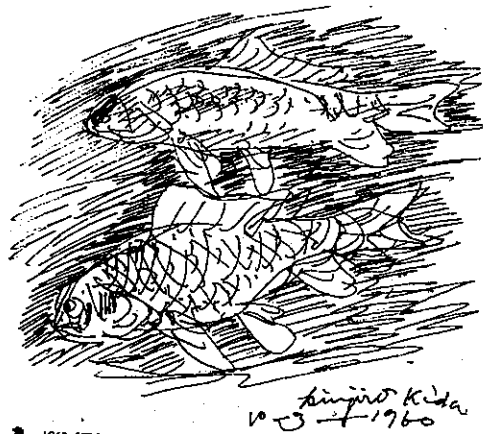
《木田の回想》(2)

「45年間には、私の絵は次第に変わっていった。素朴な写実から、将来は高い象徴性のある作品まですすみたいと思う。画面から海の実在がうすれながら、しかも海を強く連想させるような、そんな絵を描きたいと考えている。」(昭和32年「日本経済新聞」)

その後期の代表作として「青い海」、「東山から見た岩内山」、「半農の漁村」、「白い馬」などをあげることができる。それらは海と自然との一体感があり生命のリズムが感じられる。回想(1)にあるような海や自然の実相に迫るような直訳された表現の経験を通して、回想(2)のコンセプトは生きてきていると思う。

なお、晩年には「菜の花畑の落日」「落日」などの味わい深い作品もある。

優れた作品を残した木田金次郎に関して拙文を書いてきたように思う。私が学んだ高校の国語教師が有島の気鋭の研究者で『生まれ出づる悩み』などを読ようにすすめられた。そうしたこともあって、この青春の文学を何回か読みながら、そのモデルになった主人公の作品を見たいと思っていた。いくつかの絵画を見ていたが、1979年の道立近代美術館での展覧会で多くの作品群に出会うことができた。5年前には、息子の設計した岩内の木田美術館にも出かけたりにしていた。(S)



・なお、カットなどは「木田金次郎展」(「朝日新聞社」発行 1979)から引用させていただきました。

《会員の独自の活動の紹介コーナー》

小樽の北原さん仲間と植物標本展示会

私たちの会の小樽支部長をされている北原武さんが別のサークルの仲間（小樽野草愛好家）と「植物標本展示会」を開きました。残念ながら、3月13日まででしたのでお知らせすることはできませんでした。朝里川流域を3年がかりで調査した貴重なものです。

今日、多くの種が絶滅していくなかあつて、生物多様性の重要性さが指摘されています。そのなかで、このような地道な生態系の調査活動の持っている意義はとても大きいです。『朝日新聞』に掲載された記事を載せます。

《とってもうれしいニュース》

◇ 新たに9人の方々が会員に◇

今回、オホーツク・後志・十勝・釧路地区の皆さんに勧誘の手紙を出しました。その結果、8人の方々が入会されました。とってもうれしいことです。『エゾマツ』95号でお知らせしたように前回4名の方々が会員になられ、今回はさらに多くの方々が加入されました。みんなで力をあわせて自然観察、自然保護などの大きな運動を展開していきたい。加入された方々の氏名は以下のとおりです。

工藤 政司（小樽市） 木村 現市（小樽市） 木谷 文彦（土幌町）

鹿嶋 広美（音更町） 高屋 博江（新得町） 川内 和博（池田町）

平田 一行（大空町） 阿部 信行（標茶町） 大橋 四朗（余市町）



小樽

奥深い雑草の世界 小樽市の山野草に興味を持つ人たちでつくる小樽野草愛好会（北原武会長、会員25人）の植物標本展示会が、小樽市稲穂2丁目の小樽駅前第二ビル1階公共プラザで開かれている。写真。13日まで。朝里川流域を3年がかりで調査。種は違つが形状が似ている植物同士を展示している。貿易が盛んな小樽港に近いためか、帰化植物が目立つ一方、ランの自生種など貴重な植物もあるという。一標本は地味だが、実物を後世に残す意義があり、将来にわたり植生の変化を調べる資料にもなる」と北原会長。標本は市総合博物館に寄贈される。



～ 事務局 便り ～



「エゾマツ」96号から事務局便りのページが出来ましたのでよろしくお願いいたします。事務局へのご意見などお待ちしております。

<ご注意>

今年度よりふれあい交流館との共催観察会の下見は全部前日になりました。いままで木曜日の観察会の下見は1週間前の木曜日でしたが今年から 水曜日 です。

<お知らせ>

① 観察会の下見について毎年、同時期・同コースで観察会が開催されますので下見の内容が固定化の傾向があります。もっと 充実した下見の一環としてひとつのテーマを持って話題を提供して下さる方に講師になっていただき観察会のコースを巡るのはどうでしょうか、お互いにスキル・アップができることが理想と思います。 試験的な試みでもありますが、ベテランや新会員の方ともに沢山の話題を共有しながら自然にふれあえたらと思います、皆さま方のご協力をお願い致します。

* 4月～6月の下見予定、話題提供者およびテーマを記します。

4月20日(水)	道場 優さん	「鳥」
4月29日(金)	宮本健市さん	「昆虫」
5月 7日(土)	春日順雄さん	「桜」
5月21日(土)	小林英世さん	未定
5月28日(土)	菅 紀美子さん	「三角山の植物」
6月 4日(土)	未定	
6月11日(土)	室野文男さん	「シダ」

② 秋にキノコの研修会

時期は未定ですが会員の松原健一さんを講師に当別にある道民の森で開催です。決定しましたら「エゾマツ」でお知らせいたします。ぜひご参加下さい。

ホームページアドレスの変更について

<http://volaren@sakura.ne.jp>



<http://hokkaidou.me/volaren/>

2011年度 小樽支部自然観察会予定表 (案)

(北海道ボランティア・レンジャー協議会 小樽支部)

No.	月 日	曜日	行き先	行 程
1	5月 6日	金	オタモイ・赤岩	オタモイ交番前～ ノイシュロホテル
2	6月11日	土	軍事道路	朝里～張碓橋
3	7月16日	土	ニセイカウシュベツ山	上川町中越～古川 林道～山頂 自家 用車乗り合わせ
4	9月10日	土	春香山	小樽市桂岡～
5	10月22日	土	五百羅漢・潮見台	小樽市潮見台・宗 円寺
6	11月12日	土	天狗山	納会
7	2月 4日	土	穴滝	カンジキ歩き
8	3月24日	土	塩谷丸山	カンジキ歩き

※注意

1. 約1週間前、道新小樽版、読売金曜夕刊等に集合場所、時間等を掲載します。
2. 天候などの都合で日時等変更することがあるので、事前の申込を願います。
3. 参加料は1人300円、交通費は各自負担願います。
4. 自家用車の方はその旨連絡願います。(駐車場の状況・乗り合わせの可否)
5. 問い合わせ先は、0134-27-1701

自然観察 NOW

野幌森林公園自然情報
平成22年度 No.9
平成23年2月12日発行
北海道ボランティア・レンジャー協議会

〇〇〇 生き物に学ぶ 〇〇〇

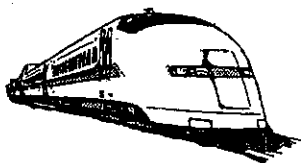


野幌森林公園に住むエゾフクロウは、もう間もなく子育ての季節を迎えます。かわいい雛のためにはたくさんのエサが必要です。

エゾフクロウのエサとなるのは森にすむネズミなどの小動物です。フクロウは、それらネズミなどに気づかれないように、音もなく空を飛ぶことができる特別の羽根をもっています。風切羽の先端にある小さなギザギザによって、空気の流れを調整し、とても静かに飛ぶことができます。

この仕組みが最先端の科学にも応用されていることをご存知ですか？

新幹線のパンタグラフには、フクロウの風切羽からヒントを得たギザギザの模様がついていて、これによって時速300kmで走る時に出る騒音を抑えているのです。



新幹線には他にも生き物のカタチを真似ている部分があります。新幹線（500系）の先頭の部分は、野幌森林公園でも夏に見ることができるカワセミの大きなくちばしにそっくりです。

魚を捕まえるために水の中に飛び込むカワセミのくちばしは、鋭い流線形です。この形が、猛烈なスピードで走る新幹線がトンネルに飛び込んだ時に出る音を小さくするためのヒントになっています。



このように、自然や生き物の形や機能を真似して最先端の科学技術を開発する「バイオミミクリー」が近年とても注目されています。「バイオ」は生物、「ミミクリー」は真似をするという意味です。

野鳥を真似るばかりではありません。蜂の巣の六角形の構造（ハニカム構造）は、とても軽くて丈夫なので、建築材料や航空機をはじめいろいろなものに昔から応用されています。

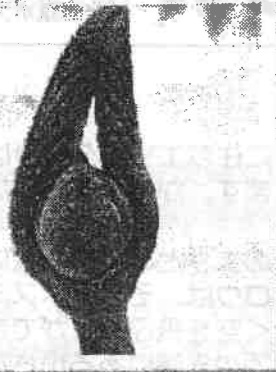
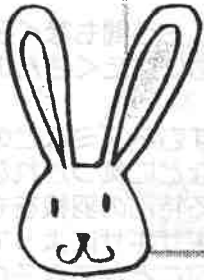
ハスの葉やカタツムリの殻には汚れが付きにくくなっています。この仕組みを応用して超撥水や、汚れのつかない壁なども作られています。またクモの糸は、同じ太さの鋼鉄の5倍、伸縮率もナイロンの2倍もあると言われています。クモの糸の秘密を解き明かせれば、びっくりするくらい軽くて丈夫な繊維が作れるかもしれません。

さらに驚くべきは、こうした特別の機能を、生き物は完璧な循環（無駄なものがなく）で、もっとも小さなエネルギー（人間のように化石燃料を使わず）で実現していることです。

38億年前から限りない淘汰を繰り返してきた地球上の生き物には、驚くほどたくさんの不思議や秘密が潜んでいます。私たち人間は、もっと謙虚に「生き物に学ぶ」という姿勢が必要なのでしょう。

〇〇〇 冬季限定！ 探してみよう。冬芽のどうぶつたち 〇〇〇

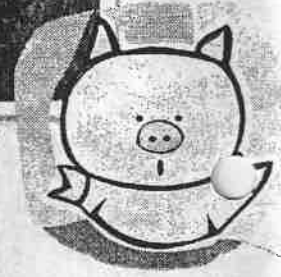
(撮影場所：国営滝野すずらん丘陵公園)



オオカメノキ



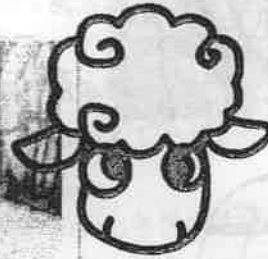
タチヤナギ



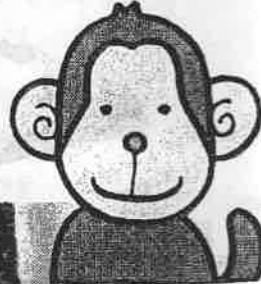
ハリギリ



オニグルミ



キハダ



〇〇〇 これからの自然観察会のご案内 〇〇〇

期日・時間	行事名	集合場所	内容
*2月13日(日)10:00~12:30	冬の森の観察会	自然ふれあい交流館	野鳥・雪上物
2月20日(日)10:00~12:30	藻岩山登山観察会	慈啓会登山口	野鳥・動物の足跡
*3月20日(日)10:00~12:30	森の中で春を探そう	自然ふれあい交流館	芽吹き・野鳥

お誘い合わせてご参加ください。 *印は自然ふれあい交流館との共催行事です。

自然観察NOW

野幌森林公園自然情報

2011・3・20 No10

北海道ボランティア・レンジャー協議会

二種類ある木部

春の陽射しが強くなってきて野幌森林公園内の植物たち、樹木は芽を出し始め、雪が溶けたところでは草本も緑色を増して元気を出てきました。春の使者といわれるスミレの季節には少し早いのですが、春への憧れの気持ちをこめたスミレの詩や歌にふれてみます。

18世紀の「スミレ」(das Veilchen ダス、ファイルヒェン)はドイツの詩人ゲーテの深い愛慕の情を詠った詩でモーツァルトが曲をつけたものです。独り咲きの小さなスミレが、羊飼いの少女に近づきたいと願うのですが、気付いてもらえず踏み潰されてしまうのですが、それでもスミレは、彼女に踏まれて死ねたと喜びます。

モーツァルトは最後に、スミレに対する同情を二行一かわいそうなスミレ、ほんとうにかわいそうなスミレ一書き加えました。彼の歌曲のなかで一番美しい曲だとされています。



今回はスミレのような草本植物とは違って形成層の活動によって年々大きくなる木本植物について記してみます。

で木部、多数の観察会の中で、芽、花、葉と説明されますが、木部についてはほとんど説明されません。建築材、家具材としての説明位です(材 Wood)。これは不公平です。もう少し木部について考えたいと思います。

学術用語的な事は別に、ここでは木部には二種類ある事を申し延べます。木部には一次木部と、二次木部に分けられる中で、一次木部には原生木部と倭生木部とがあります。発生的な面で見ると、シュート頂(枝先)にある前形成層で作られるのが「一次木部」(徒長枝)、茎(幹)の形成層で作られるのが「二次木部」(通常の木部)で一次木部は時間経過によって二次木部になって行きます。

《前形成層》

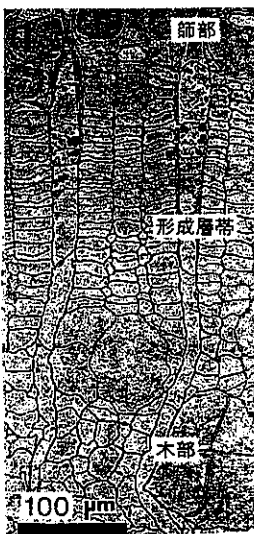
前形成層は、頂端分裂組織(シュート頂)や、根端に生じ、縦方向(体軸方向)に成長する役割をもつ維管束をつくる分裂組織で、道管、仮道管組織、柔組織、繊維組織など維管束に含まれる様々な組織を分化します。

《形成層》

二次肥大成長を行う植物体は、維管束内及び維管束管に生じる形成層によって、茎（幹）の外側には、二次師部、内側には二次木部が作られます。これは横方向成長（肥大）です。この過程でそれぞれ韌皮（じんぴ）と材に発達します。韌皮は布を作るのに利用されて来ました

木部に二種類あるの事が理解されたでしょうか。形成層も二種類ある事も同じく理解できると思います。

簡単に木部は死んだ細胞の一言の説明で片付けられるとは、木部は淋しいと思っではないでしょうか。同情したくなります。



左の写真は「ポプラの形成層帯の横断面」

* 『森林の100不思議』（日本林業技術協会編）
東京書籍。から引用させていただきました。

* ここで簡単にコメント>

皆さんもよく知っていることですが、ここで一休みして簡単な解説。

師部（師管）は葉で作られた養分を運ぶ通路。

道管は木部の一部で、水の通路。細胞間のしきりがなく、水が通りやすくなっています。

* これからの観察会の予定

- ・4月21日（木） 「春の花を見つけよう」 自然ふれあい交流館 集合
- ・5月8日（日） 「春のありがとう観察会」 同上

* 詳しくは「自然ふれあい交流館」の情報などで確かめてください。

- ・表紙は熊野美子さんがスケッチしてくれました。
- ・2010年度は24人も多くの人たちが会に加入してくれました。とってうれしいことです。育成研修会では11人、その後1月31日までに4人、そして3月中旬までに9人の方々が加入されました（会員の独自活動紹介コーナーのページに名前を掲載）。早速、幾人からも原稿をいただきました。今日の自然環境の状況を見ると、私たちの活動も大きな意味をもっていると思います。市民の皆さんにも参加してもらって大きな運動にしていきたいものです。
- ・今回の機関誌はうれしいことにいつもよりアカデミックなものになりました。これまでも平取の川村さんからは、地域の植物分布について、専門的な知をふまえた貴重なレポートをいただけてきました。また今号には、新しく加入された清水利章さんより、ヤーン・カプリスキの「記録と省察」の翻訳文をいただきました。編集を担当しながら、いつも思っていることですが、私たちの会には多彩な能力を持った人たちがたくさんいます。今後、一層そうしたすぐれた力を結集して内容豊かな機関誌をつくっていきたいです。
- ・NOW9号は安倍さん NOW10号は成田さんが書いてくれました。
- ・前号の記事「自然について—外来植物を通して見た野幌森林公園の自然、北海道の自然」は事務局でなく、五十嵐一夫さんのレポートでした。失礼しました。
- ・4月16日（土）の定期総会、Lプラザ2階 環境研修室1。13時から北原武さんの講演 「ボラレン小樽支部活動十数年—前田一步賞を受賞して」その後 15時より 総会 17時30分から懇親会があります。楽しみに、会員の多くの皆さんの参加をお願いします。
- ・次号（97号）の発行は6月末を予定しています。原稿の締め切りは6月15日、広報部まで。会員の皆さんの寄稿を待っています。



「エゾマツ」 2011, 3, 24日 発行
96号 2010年度 春季号
会長 春日 順雄